

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4570300667		
法人名	株式会社 悠隆		
事業所名	グループホーム「さくらの杜」	ユニット名	B棟
所在地	宮崎県延岡市夏田町345-1		
自己評価作成日	平成24年4月22日	評価結果市町村受理日	平成24年6月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=4570300667&SCD=320&PCD=45
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	平成24年5月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員で作り上げた理念を入り口やトイレに掲示し、各自名札の裏に入れて日常的に意識して見ることを継続している。その結果、入居者へ敬意をもった言葉遣いや態度が定着した。			
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	さくらの杜の夏祭りには、地元住民を招くことが恒例となり、住民は楽しみにして大勢の人が来てくれるようになった。また、地元住民の協力の下に避難訓練を毎年実施している。入居者が縫った雑巾を保育園に贈った。園児が取りに訪ねてきてくれた。			
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	講師を招いて、「認知症サポーター養成講座」を地域住民と家族を対象に開いた。「とても参考になった。またこのような講座を開いてほしい」との声があった。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月ごとに必ず開催し、「活動状況報告書」、「日々の暮らし一写真アルバム」を報告している。構成員から提案された認知症サポーター養成講座は、地元代表の区長さんの協力で多くの住民が参加した。			
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	定期的には、「運営推進会議」でケアサービス活動状況報告書で報告している。制度変更などでわからないことがあれば、随時相談している。市は親切に教えてくれる。			
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全職員対象の社内研修で、「身体拘束の防止」講義を受け、身体拘束をしないケアの重要性を理解している。玄関は、安全確保のため、家族の了解の下に施錠しているけれども、入居者に出たい様子が見られたらすぐに開錠し、職員が付き添っている。			
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	言葉遣いや態度も虐待につながることを防止するために、職員相互に注意し合っている。特に深夜勤務は1人になるので、対応困難な場合はいつでも管理者が駆けつけるようにして、夜勤者を支援している。			

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	ホーム内勉強会を行った。現在、日常生活支援事業対象者は1名いらっしゃるが、円滑に利用できている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分な説明を行った後質問を受け、同意を得るようにしている。今回の介護報酬改定については、家族懇談会の席上でも説明をしている。苦情はこれまで発生していない。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族懇談会と運営推進会議を設けている。家族懇談会では職員が席を外して家族のみで意見要望を出してもらっている。さらに23年度には、家族にアンケートを実施し、評価・要望をきいた。出された要望についてはすぐ対応している。			
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	処遇面の改善(昇給、一時金)を継続していることに加え、個人面談を実施した。資格試験を受験したいという前向きな職員が多く、資格取得に向けてバックアップしていきたい。			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	会社はキャリアアップにともなう処遇制度を確立し、職員のやる気を引き出している。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	会社内研修が充実した。社内・外から講師を招き、年4回から5回、全職員を対象に実施している。また、主任研修ではOJTの考え方や進め方を教えている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県北ブロック研修に参加した職員が、他のグループホーム職員と顔なじみになり、意見交換が円滑にできるようになった。そのことによって気づく事が多くなった。			

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	施設や入院先にかがいがい、本人、家族、施設関係者から話を聞いて、状況を把握している。出来るだけ本人にさくらの杜を見てもらい、納得した上で入居していただくよう心掛けている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設や入院先の病院にかがいがい、状況を把握している。家族には必ずさくらの杜を見てもらい、家族のこれまでの御苦労や思いを聞いて、気持ちを受け止めるようにしている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアプランは、入居当日より実施できるように作成し、適正なケアサービスが受けられるように努めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者は、魚の煮汁の付いた皿をお茶で洗って飲む。使い捨てペーパータオルを乾かして再び使うなど、食べ物や物を粗末にしない姿勢に教えられることが多い。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が面会に来たことをすぐ忘れる物忘れが著しい入居者から、家族が来てくれないとの訴えがあった。そこで「日記」を書いてもらうことを発案し、日記を見ることによって家族とのつながりを確かめることが出来るようになった。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	転入当初、夜間に不穏になる入居者がいた。アセスメントから、自分がこれまで守ってきた田んぼや道祖神のある場所を、毎日訪れるようにした。3週間続けたところ、不穏は目に見えて緩和された。			
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の時など、いつもの席に入居者がいないと心配して、職員に「どうしたの」と尋ねる。また、肩や腰が痛い入居者に、優しくマッサージする入居者がいる。このようにお互いを思いやる行動が見られる。			

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居し、新たな施設に移られた方には、ケアサマリーを必ず退去先に渡している。職員が何度も会いに行き、不安を少しでも和らげるようにしている。本人もうれしそうであった。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は日々のケアの中で、思いや願望を何げないつぶやきや表情から読み取り、気づいたことは速やかに実行している。			
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントについては本人からはもちろん家族からも情報を得ている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の観察から変化を見逃さないようにしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランは、担当者会議において本人や家族の意向を反映するように努めるのは勿論、変化や兆候を見逃すことなく、直ちに即、職員同士で話し合い、必要ならばケアプランを追加変更している。			
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録には、ケアプランの短期目標を記入し、日々のケアに生かすと共に、変化や職員の気づきがあれば、すぐ個別カンファレンスを開き、それをケアプランに反映させている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	病院受診の付き添い、受診の順番取りをすることもある。			

宮崎県延岡市 グループホーム「さくらの杜」(B棟)

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	夏田町区長はじめ地元住民、地域包括支援センター、ボランティアの協力支援を受けている。地元区長、住民の協力を得て実施している避難訓練は、22年に続き23年も実施した。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人と家族の納得の上で、協力医療機関と関係を築き、訪問診療や24時間対応の医療連携体制をとっている。歯科医も往診してもらっている。			
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療法人「悠隆会」の看護師が24時間体制で待機している。さらにH19年7月から医療連携体制を実施し、1週間に1度、訪問看護師による訪問看護がなされている。わずかな体調の変化もすぐに報告相談できる体制をとっている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院するときには必ず管理者が付き添い、状態や状況を説明すると共に、「ケアサマリー」を看護師に渡している。退院時にはケースワーカーと打ち合わせ、看護師から文書で報告を受けている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期については、指針を作成し、家族に説明して話し合いを行っている。状態が変化したときは、家族に連絡するとともに、主治医、訪問看護師と話し合い、方針を共有し、支援するようにしている。			
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身につけている	年に1度、消防署の救急救命士を招いて、心肺蘇生、AED実技を職員全員が実施している。23年は応援で心肺蘇生を実施した。訓練が役立った。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練マニュアルを作成した。それに基づき避難訓練を実施した。さらに23年は津波避難マニュアルを作成した。作成に当たっては、運営推進会議に延岡市危機管理室の担当者に出席してもらい、避難場所の選定と妥当性を話し合った。			

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけは敬語を基本とし、入室の際や排泄・入浴の場面ではプライバシーを確保している。介護記録等は、所定の場所に管理している。また、職務上知り得たことを口外しないことは、就業規則で定めている。(継続)			
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者の何気ないつぶやき、表情、体調などから、希望や思いを読み取り、それをできるだけかなえるように努めている。つぶやきから、城山の鐘を聞きに行き、なつかしさにたいそう喜ばれた。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員は、入居者の希望を鋭敏に読み取り、その希望を実現している。タイムリーに希望を実現するため、柔軟な勤務の組み替えもしている。(めったに外出しない入居者が希望した場合には、最優先して実現する)。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族の希望に沿って、訪問理美容師に依頼している。それ以外は家族自身が散髪したり、行きつけの理容所に連れて行っている。外出の際にはお化粧を手伝ったり、よそいきの衣服に着替えるのを手伝っている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	準備や片付けは、利用者と職員と一緒にやることが日常となっている。利用者が好む刺身を献立に取り入れたり、大好きなばら寿司や巻き寿司を入居者主導の下にみんなで作ったりしている。(継続)			
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その人にあつた食事を食するようにしている。具体的には形態(おかゆ、ペースト状)、好み、減塩(高血圧症)など、個別に対応している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は必ず口腔ケアの支援をしている。利用者の状態に応じて、声掛けや誘導、歯ブラシの手渡しをしている。(継続)			

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者全員の『生活リズムパターンシート』(センター方式)に毎日記入している。その結果、紙パンツから布パンツへの移行が可能となった入居者もいる。			
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	芋類を積極的に摂取、ウォシュレット刺激、腹部マッサージおよび散歩を取り入れている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴支援は毎日行っている。現状では一人当たり週に3~4日入浴している。希望があれば、いつでも入れるようにしている。			
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	眠れない入居者には世間話をしたり、焼酎を飲んでいただいたりしている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	特に注意が必要な血糖降下薬には、赤線を目印を付け、服薬介助している。薬が変更になったときには、日誌に記載し、皆が見て効果を確認している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	料理や掃除、洗濯たたみなど、得意分野でそれぞれ力を発揮してもらっている。嗜好品としては、焼酎やコーヒーを楽しんでもらっている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	業務を見直し、散歩などが日常的にできるように改善した。希望を表出できない入居者にも散歩をお誘いしている。			

自己	外部	項目	自己評価	B棟	外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理できる人は、小遣いを所持して自ら買い物をして支払いをしている。管理できない人には、小遣いを職員が管理し、支払いも職員が代行している。(継続)			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は、希望があれば職員がダイヤルして話してもらっている。手紙は自分で書いて、家族とやり取りしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	職員が自宅から花を持ち寄り飾ることによって、季節感を醸し出している。換気には気を配っている。味噌汁やご飯の炊けるにおいがほのかに漂い、生活感を感じるようにしている。			
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアの一角をローボードで間仕切りし、ソファーを増やし、テレビの向きを変え、観葉植物をおいて、皆が集まりやすく寛ぎやすくした。その結果、今まで以上に入居者同士の会話が弾むようになった。(継続)			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	その人の馴染みの品を、家族の協力を得て持ち込んでいる。また、ぬいぐるみ、かべ絵、花、植物などを飾っている。			
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	見当識障害の障害がある入居者には、トイレや自室に表示や目印をつけることで、混乱なく生活している。			